

ラオスのこども通信 22号

2001年10月発行

「ASPBとおカネ」特集号



出版作業が進む民話絵本『トゥーノイヤー』

ASPB事務局の運営はどうなっているのか

今号は、ASPBの事務局運営と活動資金について報告します。

これまでプロジェクトについては、支援者の方々、そして広く一般に向けてご案内してきました。

ところが、プロジェクトを担う事務局の運営については、ほとんどお伝えできていませんでした。実は現在、事務局を支える自己資金がとても厳しい状態にあります。

■ASPBの活動資金

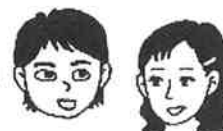
「みなさん、手弁当で無給でやっているんでしょう？」
「寄付したお金から経費分を取られたりしませんね」
私たちの活動について、こう言われることがあります。
私たちの活動は、自らの意志によって参加・支援する人々によって成り立つ、ボランティア精神を出発点とした運動です。かつて私たちががさやかに活動を行っていた当時は、無給のボランティアのみで運営し、事務経費をそれほど意識せずすすむ段階、規模にありました。とはいえ、どのような活動を行う場合でも経費は必ずかかり、その資金を確保してこ

そ、プロジェクトを実行することができます。

今日、ASPBは日本の社会から年間約3,000万円を預かり、ラオス社会に対して子ども文化センターや学校図書室支援など公共サービスを担う立場にあります。これらの社会的責任を全うするうえで欠かせないのは、専従スタッフが常駐する東京事務所とヴィエンチャン事務所の安定的な維持であり、立ち上げたプロジェクトを先細りさせることなく活発にし、定着させていくことです。こうした取り組みについてお知らせします。

事務局の仕事とおカネのしくみ

小川



赤井

東京事務所のスタッフは赤井(A)と小川(O)の2人。今日も元気に忙しく働いています。

■スタッフの給料はどこから出るのか

O：スタッフは電話とかイベントでいろんな人と話すけど「ボランティアでこういうプロジェクトをやるのは大変ですね」って言われたことない？

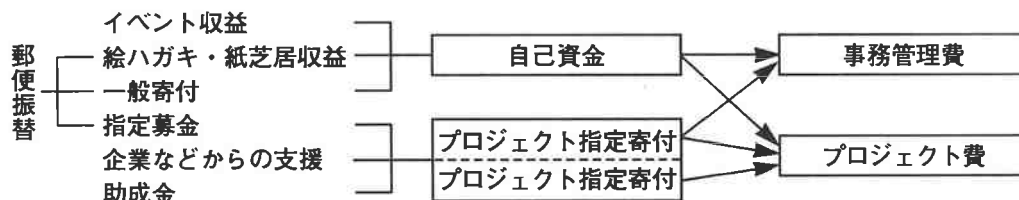
A：あるある。お給料もらってないんでしょ？とか。私たち2名のスタッフは有給なんですよ。「お給料はどこから出てるの？外務省？国連？」って質問も、けっこうあるよね。

O：うーん。NGOというと、ボランティアか政府系か、イメージが両極端なんですねえ。

A：答え。ASPBの人件費や事務所の家賃・光熱費、事務用品や消耗品、通信費など、いわゆる「事務管理費」の大部分は、いまこれを読んでくださっているみなさんからの「一般寄付（使いみちを指定しない寄付）」に支えられています。郵便振替の通知が届くたび、思わず「ありがたいなあ」って言葉が出ちゃうんですよ。本当です。

O：そしてボランティアの仲間たちの協力によるイベントの収益も大切な資金源だよな。

ASPBのおカネの流れ



■東京事務所の仕事

O：夏休みに田舎に帰った時、親戚の人に「今回はいつまで日本にいられるの？」って言われた（笑）。

A：なるほど。NGOの職員だから、ずっと現地に行ってると思われちゃう。そういえば「ラオス」の子どもに絵本を送る会が「東京で」何をしているのかって、わかりにくいかもね。

O：大きいのは資金集めだよな。助成金の申請書や報告書を書いたり、企業に支援を依頼したり。

A：私はラオス事務所の会計管理も担当してるから、現地の帳簿や領収証のチェックとかも。各プロジェクトの実施はラオス事務所のスタッフ（有給です）が担っているけど、全体の統括は東京の仕事。ほぼ毎日メールで連絡をとりあって、進行状況の報告とか問題点を相談したりして。

O：あと事務所の日常業務と言えば、支援者名簿の入力、領収証やお礼状の作成、資料の発送、「通信」の発送、会議の連絡、イベントの企画・広報・実行、ボランティアへの連絡、それから、

A：あのお、キリがないので、整理してみませんか。

A）ラオスの子どものニーズに応えるプロジェクトのために、資金や人材を集める仕事。

イ）集めたお金がラオスでより高い効果を生むように、プロジェクトを運営管理する仕事。

ウ）支援者・団体、ボランティア、専門家、現地カウンターパートなど、多くの人によって成り立っている、誤りなくスムーズに進むようにする仕事。

■事務管理費はNGOの「基礎体力」

O：こういう仕事に対して、人件費や事務所の家賃、通信費などの経費＝事務管理費が必要になります。

A：「私の寄付金は全てラオスの子どものために使ってほしい」という声も時々あるわよ。非営利団体が経費を取るのはおかしいと一般的には思われているみたい。

O：でも事務管理費がなくて、ア〜ウの仕事が不十分だったらプロジェクトがきちんと実行できなくなる。その影響をいちばん受けるのは、結局ラオスの子どもたちなんだよね。

A：そうだ、事務管理費って団体の「基礎体力」みたいなものかも。いいプロジェクトとプロジェクト費があっても、それを活かす体力がないと、やり遂げられない。

O：私、体力なら自信ある！

A：そうじゃなくて…

自己資金は活動の原動力

事務管理費はプロジェクトにとって大変重要です。しかし、今年はその事務管理費がとても不足しています。なぜ、今年はそうなっているのか、8月末までの収入の内訳を、昨年1年間と比較してみました。

■寄付・支援には2つのタイプがある

プロジェクトを指定した寄付・支援には、大きく分けて次の2種類があります。

1) プロジェクト費+事務管理費（一部）を支援
そのプロジェクトに必要な事務管理費が、あらかじめ一定の割合（15%～20%ぐらい）で含まれているタイプです。企業や個人の方などは、こうした形で支援して下さることが多く、また、私たちが「寄付メニュー」として設け、郵便振替などで「絵本印刷・図書袋・CCC・学校図書室」への支援をいただいている「指定募金」も、このタイプです。

2) プロジェクト費のみを支援

事務管理費が含まれないタイプ。例えば、国際ボランティア貯金、外務省NGO事業補助金や、各種財団による助成金などがそうです。本の印刷費、図書袋の製作費、配付セミナー費など「プロジェクト費」に対する資金助成ですが、ここには「事務管理費」は含まれていません。そのためプロジェクトを実施するにあたって必要となる事務管理費を、自己資金で補うことになります。通信費や現地のスタッフ人件費については、プロジェクトに必要な費用として一部支援される場合もあります。しかし、事務所経費や東京事務所のスタッフ人件費は、ほとんど支援対象外となっています。

なぜ助成金に事務管理費を含まないタイプが多いのかというと、助成金や補助金はそもそも事務管理費を自力で用意できる団体を、社会的に信頼できる団体と位置づけているからです。

■自己資金の力

個人の方を中心にいただいている一般寄付は、自己資金の貴重な財源です。

自己資金は、財団などからの助成との車の両輪ということがができます。しかし、事務管理費として使われるだけではありません。プロジェクトの中でも単独で資金助成を得にくい「プロジェクトの維持・活性化」を行う上

で、自己資金が力を発揮します。

例えば、学校での読書の活動を維持し活性化するには、本の補充や出版が必要です。

また、「ラオスの様々なニーズに柔軟に迅速に対応」するためにも、自己資金はなくてはなりません。例えば、現地スタッフの急な地方出張など、費用は軽微だが急を要するような場合、助成金では、ほとんどが年に1度の受付で手続に時間がかかるため、迅速な対応ができません。

このように、私たちにとって自己資金は、あらゆる活動の原動力であり、栄養補給であり、いざというときのための瞬発力なのです。

■2001年度の収入の状況（8月現在の途中経過）

今年は昨年に比べ、支援団体数は10件から18件へほぼ倍増しています。中でも、収入に占める「事務管理費を含まないプロジェクト指定寄付」の割合が、30.4%から41.3%に増えています。つまり、プロジェクト指定寄付では事務管理費がほとんど確保できていません。（グラフ参照）

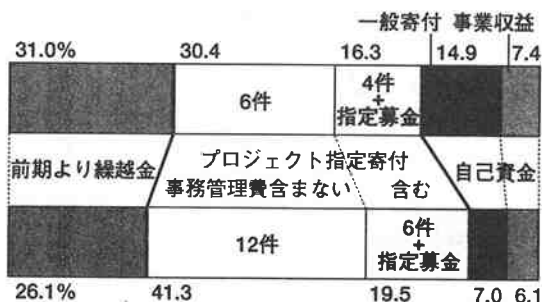
一方で、「事務管理費」を補うべき「自己資金」（一般寄付+事業収益）は大幅に減っています。一般寄付の件数を1～8月の合計で比較すると、2000年は約230件だったのに対し2001年は200件と、減少傾向にあり、加えて10万円以上の大口寄付も減ってきているのです。

このことは、実施すべきプロジェクトの規模に対して、十分な事務管理費が確保できていないことを意味しています。このままではラオスと東京両方の事務所の運営に影響が出ることが心配され、自己資金の確保が急務となっています。

収入の内訳

00年1月～12月
¥29,811,455

01年1月～8月
¥22,425,865



基礎体力づくりのために

■NGOに求められる経営能力

私たちASPBの活動の柱はラオスでのプロジェクトですが、それを支え、質を高め、支援者、参加者を広げるためには、次のように様々な業務や取り組みが必要になります。

- 1) プロジェクトを立ち上げる。
(出版、図書室、CCCなど)
- 2) プロジェクトを維持し、活発にする。
(図書の補充、人材育成など)
- 3) 国内活動をする。
(活動紹介、資金づくり、参加の呼びかけ、提言など)
- 4) 質の向上を図る。
(調査、評価、専門能力の向上など)
- 5) 活動を円滑にする。
(組織強化、財務管理、戦略策定、広報など)

これまで支援者の方々にお知らせし、つながりをもってきたのは 1)、3) で、他はご存知ない方が多いかも知れません。今、私たちにとっての最大の課題は、活動を円滑にする基盤となる自己資金を安定化させることにあります。それには、国内活動の強化を図られることが必要です。これらはすべて表裏の関係にあります。資金集めのためには人が必要。しかし、お金がなければ人を揃えられない。そうするとお金も集められない……。

こうした状況は、今、NGO全体が抱える問題となっています。いかに資金生成能力を高めていけるかが大きなテーマであり、そのために、活動と会計の透明性を高め、社会的信用を強化しなければなりません。それには、戦略的に組織運営を行い、プロジェクト運営の専門能力を高めていかなければならない、といった課題が目前にあるという状況です。

これは即ち、社会に支持される商品・サービスを提供してはじめて資金調達が可能になるとい、企業経営に求められるのと同様の能力が、NGOに求められているということです。

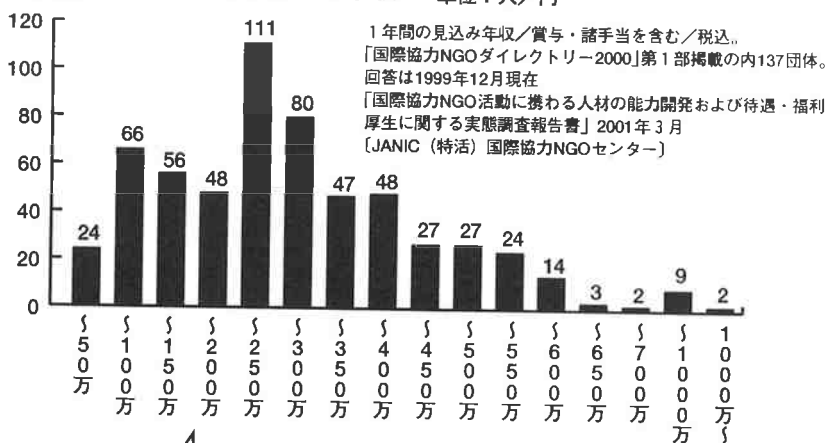
■NGOスタッフの年収

ASPBは、プロジェクトなどの企画力と会計の透明性の高さは強みだが、人が十分に確保できないため組織の運営が弱い、と自己診断をしています。これまで、プロジェクトにほとんどのエネルギーを投入してきて、組織がためがそれに追いついていなかったのです。

現在、中期計画でめざしている組織づくりは、「片手間ボランティア」から脱却して有給専従の事務局長を配置して体制強化を図るとともに、専門家も含んだボランティアのネットワークの構築です。そのためには、事務所も現在のように机ひとつしかない居候の状態から抜け出なくてはならないと考えています。しかし、今は新たな家賃に耐える体力はありません。

NGOの能力強化のための様々な研修や研究会が、NGO自身によって、あるいは外務省の支援によって(即ち、血税を使って)行われ、私たちも参加しています。そうした場でNGOの仲間同士で悲鳴のように出されるのは、「研修をしても、人件費が調達できなければ意味がない」「人件費が確保できれば、人材は集まる」といった声です。JANIC(国際協力NGOセンター)の調査によると、有給専従スタッフの年収は、200万~250万円の人が最も多く、次が250万~300万円、3番目が50万~100万円でした(グラフ参照)。ASPBのスタッフは150万~200万円の水準です。何とかして2人体制から3人体制を実現したく、また、できる限り世間並みの給与水準に近づけたいと考えています。

金額別有給専従スタッフの年収 単位：人/円



■自己資金確保に向けた取り組み

管理費、人件費など、自己資金をいかに確保するか。ASPBが、これまでにどのような取り組みをし、今後、どうしていく考えなのかを述べます。

資金調達においては助成金の多元化を図ってきました。現在ではODAとの連携を模索しています。

経費削減の努力は、これまで東京事務所は机1つでやりくりし、また、ボランティアによる東京事務所経費の支出内容の監査を進めてきました。実作業では、会計の入力をはじめ、ニュースレターやホームページがボランティアの協力によってでき、また留学生とのジョイントによるイベント参加などを行ってきました。

このほか、東京で行っていたプロジェクト会計処理をラオス事務所に移管するとともに、各種書類を英文で作成し、また東京・ラオス間で電子メールを使用したことで、情報共有の促進、事務の迅速化、通信費削減を図ってきました。

こうした業務改善を続けるとともに、今後は、ラオス事務所のマネジメント能力・機能の向上を図りながら、ラオス事務所の現地NGO化を視野に、現地プロジェクトの担い手を育成し、自立運営をめざしていきます。

他のNGOでは手工芸品事業部門を設けている団体もあります。ASPBも視野には入っていますが、現状の体制では難しいと判断しています。

現在、寄付メニューの再構成と、新たな仕組みづくりを検討しています。例えば、人件費に特定して寄付を下さる方々がいます。通信の読者の個人・団体・企業のみなさんが、事務局を具体的に支援していただけるようなメニューの案を練っています。「こんなメニューならお金を出す」「こんな応援をしたい」というアイデアを募ります。ぜひお寄せください。

■地球規模の町内サービス

私たちNGOは、社会サービスを行う団体のひとつであると考えます。例えば、お年寄りのケアをするNPOが地域に根ざした社会サービス機関なら、NGOは国境を越えた地球規模の町内サービスです。それは国家の枠組みや利害にとらわれることなく、生活者の立場から同時代に生きる者同士の共感に支えら

れたものです。

今日、社会サービスを行う主体には、行政、企業、市民団体（NPO／NGO）の3つがあり、人々は行政には税金を納め、企業には料金を払います。それらと同じように、市民団体のサービス提供が、人々によって認知されるよう頑張るのが私たちの仕事だと考えています。

私たちの存在、私たちが取り組んでいることの必要性が、日本の人々に認知されるために、ASPBと支援者が、どういうつながりをつくることができるのかは、大きなテーマです。年会費による会員制度がつながりをつくっているNGOは少なくありません。しかしASPBは、そうした制度をとらず、応援してくれる人はみんな会員、と考えてきました。その方のペースで、その方の決めた金額でお金が振り込まれるという寄付を、様々な方からいただいています。「支援したいけれど、年金生活で厳しいので通信は止めて欲しい」と連絡をくださる方もいらっしゃいます。私たちは、どうぞこれからも通信を読んでいただくという応援を続けてくださいと、通信をお送りします。今回の特集は、お金を支援してくださいということなのですが、それとともにお伝えしたいことは、こうした支えに私たちがどれだけ元気づけられて活動が続けてこられたかということです。

その人なりのやり方、つながり方での応援・支援がある。それこそがボランティア精神を原点にしたASPBの活動なのです。

緊急募集「図書補充費」

読書推進プロジェクトを、活発に保つために

これまでに配付してきた図書箱・袋への図書補充費が不足しています。本年度の計画では200校分を予定していますが、現時点で確保できているのは、105校分です。本に親しみ始めた子どもたちが興味を持ち続け、利用してもらうためには、継続した図書の補充は欠かせません。数年前に配られた100冊程度の本は、すでに何度も読まれ、ぼろぼろになってしまっています。これまでに配った図書箱・図書袋を無駄にしないためにも、図書補充費へのご支援をお願いいたします。1口¥15,000で、1つの小学校へ約120冊の図書の補充ができます。（事務管理を含んでいます）郵便振替用紙の指定募金の欄に「図書補充」とお書きください。

プロジェクトの動き

[1] 子ども文化センター (CCC)

もっと子どもの意見を反映させるために

—— 子ども文化センター全国会議

野口朝夫

「・CCCは子どもたちの楽しみの場である・CCCの中心は図書室にある・CCCは子どもたちの内面の豊かさを探求する場である」という3つの理念を確認したのが、2年前に行われた全国CCC会議。その後、情報文化省にCCC担当セクションが設けられ、政府としてこの活動を積極的に推進する方針が打ち出されるという変化の中、6月5、6日ヴィエンチャンに全国から関係者が集まり、今後、活動をどう展開していくのかが話し合われました。

会が提示した討議テーマは、「各地で新たに立ち上がっているCCCを皆でどう支援していくか」「会からの資金は何の費用にあてるのがよいか」「もっと子どもの意見を反映させるためにはどうしたらよいか」です。

■悩みや弱点を語り合い、研修を企画

会議を通して明らかになったのは、皆がCCC活動を自分たちの活動と考えるようになってきたことです。それは、「数」よりも「質」への関心が高くなっている点から感じられました。これまでは、参加する子どもの数の多さが競われた風がありました。今回はそれよりも、スタッフ、講師の能力が足りないために効果が十分に出きらないという質に関する悩みが挙げられました。その結果、皆でスタッフ、講師の研修を企画することになりました。

施設が狭く、参加希望の子どもたち全てを受け入れることが出来ないといった悩みとともに、スポーツや音楽の指導者がいないため、子どものニーズに応えられないという悩みも出されました。一方、参加者の対象を広げる様々な試みとして、親の参加は教育や活動への理解を得るために有効であること、中学を卒業した子どもたち（＝CCC卒業生）がリーダーとして参加することが活動の広がりを生み、子

どもの主体形成に役立っていることなどが報告されました。

この数年、ラオス社会が開放的になるにつれ、子どもを取り巻く環境も大きく変わり始めており、賭博、薬物などの子どもへの浸透が問題化してきています。CCCは非行防止という面からも社会から期待されています。

運営資金不足への対策として、ASPBからの支援だけでなく他NGOやラオス政府、国際機関から受け始めていることが報告されました。とはいえ、会が表明した支援額通減については反対意見が強く、3年での見直し案、新規CCC支援のための既存CCCへの支援減額案など、再考が要請されました。

■「良い子ども」論議

「親の言うことを黙ってよく聞く子が良い子ども？」という、少し面白いやりとりがありました。ラオスの子どもは、人の前では「自分の意見を言わない」傾向があります。会は、ラオスの子どもが自分の意見を言うことができるように、もっと表現できるようにしてほしい、と考えCCC支援をおこなってきました。しかしこれは「東京の押しつけ」なのかと、いささか心配があります。そこで、各CCCの所長、政府・地方自治体関係者に、「発言する子どもはよい子か？」と尋ねたのです。

すると異口同音に、昔は親の言う通りに黙って従うのが「良い子ども」であった。しかし、今は自分の意見を言う子の方が「良い子」だ。先生に対しても、自分の意見を言うことが正しい、新しい社会を作るためにはそうしなくてはいけない、というのです。これにはいささか驚きました。もっと親の意見に従って調和をはかれ、なんていう意見があるかと思っただけですが、全くありません。思わず政府関係者に「本当？」と念押しをしてしまいました。CCCの卒業生たちが育つことでラオス社会は、変わってゆく、それが大事だということです。ラオスは現在、政治的には多様な考えを認めていません。それもこれから変化が生じてゆくということでしょうか。

ミニ報告「絵本2000冊運動」

スタートからこれまでにラオスへ送られた絵本は約1350冊になりました。(2001年8月末現在)。ご協力に感謝します。引き続きご参加ください。

[2] 出版

絵本制作、日本とラオスを往復して 進行中

森 透

■民話絵本・3作品

2000年に実施した民話絵本コンクールの優秀作品のうち、3作品を出版に向けて作業を進めています。

蛇の夫を迎えた妹は、ある日、夫が凛々しい青年に姿を変えると姉のねたみを買って、というモン族の昔話『シナーとユー』。父母を亡くした貧しい若者が、その遺言に従って寝床の下を掘ると弓や馬が現れる、やはりモン族の話の『働き者のトゥーノイヤー』。孤児がサルを持っていたドラを叩くと町が現れるというヴィエンチャンの由来を語った『魔法のドラ』が、その3作品です。

コンクールに出された作品は、出版するには、印刷に適したページ数に構成を直したり、文章と絵とでつじつまが合わない点を修正したり、より読み手の心をつかむように絵を描き直したりという作業が必要です。絵本の編集者とラオスの作家と作者との間で、作品が何回も往復しながら、完成度を上げていきます。

物語と文章表現についてはラオスの作家が見て、場面展開や絵の表現については日本の編集者がアドバイスをします。ASPBのヴィエンチャン事務所に編集委員会を設けていますが、絵本の編集者はまだラオスで育っていません。そのため、編集委員会にとっても、とてもいい学びの機会となっているとの声がヴィエンチャン事務所から上がっています。

作者がヴィエンチャンから遠くに住んでいることなどから連絡に時間がかかり、日本語、英語、ラオ

ス語という3か国語でやりとりしていることもあり、当初の計画より遅れてしまっていますが、もうじき印刷の工程に入ります。

民話絵本の出版にあたってはキャノン株式会社と地球市民財団の支援を受けています。

■環境絵本

ラオスに環境の絵本を送る会（代表：苗村信行さん）より、ラオスの子どものために環境問題を扱った絵本を作りたいという申し出をいただき、どのような作品を作るか検討を重ねてきました。

当初は、すでに出されている子ども向けの環境の本をラオス語版にしようという案が出て、候補選びをしていました。ところが、一方で書き下ろし作品を出したいという気持ちも強く、なかなか事が運びませんでした。

しかし、ついに構想が固まりました。『ななちゃん、ラオスの市場に行く』（仮題）。

外国人（日本人）の目を通してラオスの暮らしを見つめ直すという内容で、バナナや竹などを使ったラオスの伝統的な包装に注目し、同時に蔓延するビニール袋による包装の問題点に注意を喚起します。ラオスの子どもだけでなく、日本の子どもにも読んでもらえる作品をめざして、現在、作業を進めています。



[3] 現地プロジェクト進行状況

<出版>

●印刷完了

『ウティンを傭んで』3000部
キャノン株式会社 出版支援
『ラオスの歴史』800冊（出版費の一部を支援）

●出版協力

『The Dream Comes True』5000部
株式会社ミクプランニングにより現地で出版

●出版準備中

民話絵本 3タイトル（すべて原稿作成中）
再版 3タイトル（うち1点原稿完成済み。
1点挿絵改訂作業中。1点選定中。）
翻訳絵本 1タイトル（翻訳中）
環境絵本 3タイトル（うち2点はラオス、1点は日本で準備中）

<読書推進>

●図書袋の製作・配付

160袋製作。サワンナケート県の80校に11月頃配付予定

●学校図書室新規開設 16校

5月1校開設済み・9月～11月15ヶ所オープン予定

●既存の学校図書室（55ヶ所）に図書補充

来年3月までに実施予定

●教員養成学校における読書推進セミナー

10月1校・12月3校で実施予定

<子ども文化センター（CCC）>

●全国6ヶ所のCCC運営費を支援（継続）

●全国11ヶ所のCCC図書室へ図書補充

<専門家派遣>

●調査プロジェクト 9月5日～14日実施

●紙芝居プロジェクト 来年1月～3月頃実施予定

踏み出す勇気 —— 全国紙芝居まつり

森 透

8月25、26日、東京の文京区民センターで「第7回全国紙芝居まつり」が行われました。日本各地や海外から約300人が集まり、ラオスでの紙芝居の取り組みに向けて多くのヒントをもらいました。

■紙芝居の力

街頭紙芝居風の股旅もの、尺八を吹きながらの昔話、超大型の作品。参加者が思い思いの作品を披露。印象的だったのは演じ手の嬉々とした表情でした。分科会「紙芝居のさまざまな活用を語り合おう」も充実していました。

幼稚園では紙芝居は大人気。でも子どもを集中させるための道具として安易に走らないように注意すべきとの声も。

小学校の先生は、バイキングの昔話の紙芝居を子どもたちが合作し、ふだんの授業に馴染めない学習障害を持つ子も垣根なく参加できたと報告。これはアメリカでのこと。

中学校で、ドラッグや援助交際を題材にした作品を取り上げると、生徒たちは、昔話を聞く小学生とはまったく違う集中力で受け止めていた様子だったそうです。とはいえ感想を求めると誰も発言しない。それも日本の実状です。お年寄りの養護施設に勤務する男性は、日常の介護に忙殺されそうになりながらも、人と人が場と心を共有できる紙芝居に大きな期待を寄せ、孤独の極みであるボケを治す効用があるのでは、と語りました。

■ちょっとしたハードル

このように可能性に満ち、熱い議論が交わされる紙芝居ですが、世の中では冷遇されているのが現状です。書店には置いておらず、絵本を買うようには

手に入りません。図書館にはありますが、絵本に比べて点数が少なく、利用促進のための力入れ具合も今一歩。その理由として考えられるのは、演じ、みんなで聞くという「参加型メディア」であることが、絵本にはないハードルを図書館員に感じさせているのではないかということです。必要なのは踏み出す勇気だと思いました。

また、各地に演じ手のボランティアがいますが、地域の中でその人たちと学校などの演じる場とを結びつける役割の人がいないということもあるようです。

作品については、手づくり紙芝居という力作が次々と誕生していながら、なかなか出版には結びつきません。出版社にとっては、厳しい時代にあって、あまりリスクをおかしたくないようです。

こうした日本の状況がある一方、www.kamishibai.comのホームページで日本の民話の紙芝居のビジネスをしているのはニューヨークのマーガレットさんです。お株を取られてしまったという感じがしないでもありません。負けてられないです。

ASPBでは、これまで紙芝居づくりのワークショップなどを行ってきましたが、普及や定着とまでいきません。演じ手、作り手も、生活にゆとりがあってこそ生まれるのではないかという意見もありますが、重要なのは担い手のカギとなる人物を見つけ出し、支援していくことだと考えます。今年度と次年度は、そうした方向で取り組んでいきます。

ラオス現地情報 —— スタディーツアーに同行して

前号でお伝えした5月のアサヒビールのスタディーツアーに同行した、2人のボランティアスタッフによるラオス現地情報です。

トンカンカム市場体験記

清水 宏子

ラオスは食材が豊かだ。それはビエンチャンの首都だけでなく、規模は違うがもっと小規模の市場でも変わりはないようだ。買う方にしても選ぶ、とにかく選びまくる。いじり回すことはないが、一瞬の目

の鋭さがやはり違う。野菜についての種類は特に多い。物珍しさに歩く速度も落ちる。葉ものはまだしも、見慣れぬ木の実様のもの、草のみ(これは相当苦いらしい)、特に玉葱とニンニク、生姜類については



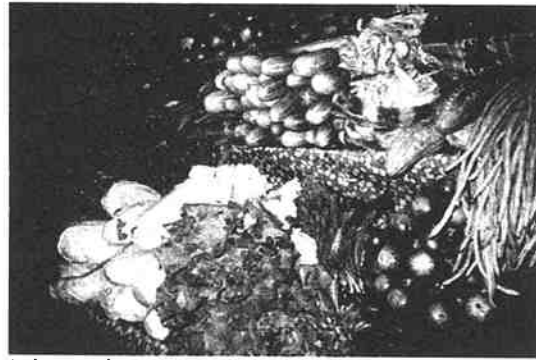
ハーブ屋さん。手前：薪に見えるけどハーブ

種類が豊富で料理によって使い分けしている(らしい。見ただけで見分けるのはまだ困難)。葉っぱ類も食堂などで山のように盛られて出てくると、これって全部生で食べられる?(というくらいに雑多で豊富な種類と量)と思うが、市場で束になっていると、ああ、野菜なんだと改めて実感する。ただすべてに使えるのは、滋味が豊かということ。茄子にしても種類の違いはあるにしても、甘さを伴った植物本来の味が生きているような気がする(この小さな丸コロコロ茄子については…色・うす緑、あまりに球形…によって食べてみるまでなすと気が付かなかった)。見知った素材もある。竹の子、香草類、小さいが大根

ソッパルアン体験記

ソッパルアンは、ヴィエンチャンの中心部から4～5キロのところにある寺で、野性味あふれた薬草サウナが併設されています。温泉好きの私には外せないスポットゆえ、いさんで潜入してきました。

鬱蒼とした敷地内に木造高床式の建物が一棟、床下で寺の女性が薬草を蒸しており、上にある小部屋に蒸気が充満してサウナになっています。まずは階段を上って脱衣室で服を脱ぎ、周りにかけてある大判の布を体に巻きましょう。貴重品は隣の休憩場にいる、ボスのようなおじさんの横の囲いの中に入れます。サウナの中は蒸気でくもっているうえ小さな窓があるだけでとても薄暗く、レモングラスの香りがいっそう強く感じられました。暖まったらと言っても、もともと気温が高く始めから汗だくなのですが、休憩場で座ってやかんのお茶を飲んだり、台に寝そべったりします。お兄さんにマッサージを受けている人もいます。下りて水浴びして体を冷やすの



元気いっぱいの野菜たち！

もあった。扱うものについては野菜と肉類、調味料関係などに分かれている店が多い。卵はもちろん個売り。ほとんどの食材はここで間に合う。ちなみに郊外では、肉、果物類は、自転車で量り売りも来てました。変わっているのはデザート類。何種類か台の上で売られているが、お薦めは抹茶色したゼリーで、ココナッツの甘さがしつこくなく香りほのかで思わず買い過ぎて食べ過ぎる。恐ろしいところだ！！

出来るなら、片端から試食してみたいのが本音の市場チョイ探索でした。

加藤 佐代子

も一興です。何度も出たり入ったりしていると、止めどない汗と共に旅の緊張もほぐれます。ただ、慣れていないからだとは思いますが、体に巻いた布がどんどんずれ落ちるので、完全に緊張から解きほぐされているわけにはいきませんが。

居合わせたラオス人の二十歳くらいの女の子とのおしゃべりも忘れられません。彼女は英語がネイティブで、その上、近いうちに確かスウェーデンにお嫁に行くそうで、その興奮のせいなのか、インターナショナルな教育のおかげなのか、しゃべりだしたら止まりませんでした。それまでラオスでは見かけなかったタイプで、余計に圧倒されました。

はだかのコミュニケーションは日本の銭湯でもラオスのサウナでも人を社交的にするようです。最後に着替えたボスおじさんにお金を払って帰ります。おじさんは英語が通じますから、みなさんもヴィエンチャンに行ったら訪ねてみたいいかがでしょう。

国内活動

東京事務所の動き

太字は今号に報告があります。() 内はASPBからの出席者・参加者です。

■6月

- 2～8日 子ども文化センター会議のため
野口がラオス出張
- 6日 大田区国際交流団体懇談会 (小川)
- 10日 運営会議 日曜勉強会 お話：田島伸二さん
- 12日 名古屋市立大江中学校の修学旅行受入
- 14日 「南」の子ども支援ネットワーク会議 (野口)
- 15～7月13日 青梅中央図書館でラオスの絵本と
翻訳貼付本を展示
- 22日 「ワールドカルチャーキャラバン」
- 23・24日 青年海外協力隊富山県OB会
「もっと知ろうラオス」(チャントソンが講演)
- 25日 教育協力NGOネットワーク研究会 (森)
- 28日 国際ボランティア貯金配分金交付式 (野口・赤井)
JANIC総会 (森)
- 30日 「ラオスの子ども通信」21号発送作業

■7月

- 4日 CCネット
「ラオスの子どもたちに絵本を送ろう」

- 6日 青梅中央図書館 文学講座 (チャントソンが講演)
- 8日 運営会議
- 14日 沖電気工業「ラオス語絵本をつくってラオスの子ども
たちに送ろう！」
- 16日 紙芝居プロジェクト打合せ
ラオス大使館と麻布十番納涼祭り国際バザールの
打合せ
- 25日 アサヒビールスタディツアー報告会
- 26日 シンポジウム「21世紀の企業人を考える」(小川)
- 31日 教育協力NGOネットワーク研究会 (森)

■8月

- 1日 麻布十番納涼祭り国際バザール説明会 (小川)
- 4日 国際バザールスタッフ打合せ
- 12日 運営会議
- 13～19日 夏期休業
- 24～26日 麻布十番納涼祭り国際バザール
- 25日 全国紙芝居まつり東京大会 (森)
- 29日 「NGO活動環境整備支援事業」第1回
NGO研究会 (森)

イベント報告

●日曜勉強会

「アジアの子どもたちの想像力と創造力
～識字教育を通じて」

お話：田島伸二さん 6月10日 東京事務所
「子どもたちに必要な『識字』とは、読み書き計算能力だけでなく、伝えていく力＝コミュニケーション能力。それは絵や音楽、温もりと等しく、子どもにとって欠かせないもの」と語る田島さん。パキスタンでの実践活動から、絵本づくりなど興味深いお話を伺いました。18人が参加しました。

●アサヒビール・キッコーマン共催

「ワールドカルチャーキャラバン」ラオス料理編

6月22日 キッコーマン東京本社・KCCホール
両者の社員を対象に、社会活動への参加のきっかけとして、食文化を通じてNGOの国際協力活動を知ってもらおう、というイベント。月1回アジア、アフリカで活動している各NGOが活動紹介と料理教室を行う全8回のシリーズです。チャントソン直伝のラオス料理に、他の企業の方も含め30人が挑戦、新しい味覚との衝撃の出会いを果たしました。

●CCネット

「ラオスの子どもたちに絵本を送ろう」

7月4日 アサヒビール本社・大会議室

CCネットは11社の社会貢献担当部門のネットワークで、メンバー企業の社員を対象に、毎年ボランティア体験イベントを開催しています。今年はシャンティ国際ボランティア会 (SVA) とASPBが協力して翻訳絵本づくりイベントを企画し、SVAの“シート方式”と、ASPBの“切り貼り方式”を紹介。約80人が参加し、ASPB方式では20冊の翻訳絵本ができました。会場ではラオスで出版した絵本や図書袋を展示、手工芸品などの販売も行いました。

●沖電気工業OKI120周年ボランティア

「ラオス語絵本をつくってラオスの子どもたちに
送ろう！」7月14日 目黒研修センター

昨年に続き2回目の開催です。ラオスの教育事情やASPBの活動の紹介のあと、だんご虫お話の会による絵本の読み聞かせ。仕事で忙しい大人にも絵本の楽しさを思い出してもらおうのが狙いです。その後の翻訳貼り作業もひと味ちがう体験に。おやつのココナツゼリーも好評でした。社員と家族のみなさん約30人が参加し、47冊の翻訳絵本ができました。

●キッコーマン「ラオスの子どもに絵本を送る集い」

6月に近畿支社、7月に高砂工場で開催

社会活動推進室の天坊智子さんが地方の拠点を巡り、社員の方々にボランティアを呼びかける試

今年もたくさんできました (沖電気のみなさん)

みとして、「絵本2000冊運動」体験版が実施されました。平日の終業後でしたが、大勢の方が参加され、翻訳絵本がそれぞれ30冊ずつできました。

●麻布十番納涼祭り「国際バザール」

8月24日～26日 東京・港区一の橋親水公園

ASPBはこのイベントを、まとまった自己資金を得る上で有効な“収益事業”と位置づけています。3年目の参加となる今回は、企画段階からラオス人留学生とASPBボランティアとの協力を進め、チラシなどで「NGOの店」をアピール、手づくりラオス料

理で他のプロの店との差別化を図りました。

3日間を通して、ボランティアとして延べ52人の留学生と60人の日本人が参加。アルコール販売の全面禁止に伴う品目の変更や、出店位置の変更などを乗り越え、一丸となってがんばりましたが、売上は予測を下回る約146万円、収益は約64万円でした。収益は、ラオスでの絵本出版費用として役立てる計画です。なお、出版は2002年になります。どうぞお楽しみに。みなさん、お疲れさまでした！



お知らせ

●NGO専門調査員の受け入れがスタート

8月6日より、NGO専門調査員の近藤知子さんを受け入れます。企業での経験を活かして、ASPBの組織運営の課題調査と、改善・強化へ向けた提言をしていただく予定です。ラオス事務所の運営調査のため現地出張も計画しています。任期は来年の3月まで。(NGO専門調査員制度は、外務省のNGO活動環境整備支援事業の一環です)

●国際協力フェスティバル2001

10月6日(土)・7日(日) 東京・日比谷公園

国際協力に対する市民の関心と参加を高めようと、NGO、政府機関など約200団体が一堂に会し、活動紹介などを行います。テーマは「見つけた！私にもできること」問合：同フェスティバル実行委員会事務局03-5423-0571、<http://www.apic.or.jp/festival2001/>。ASPBは、ボランティアが中心になって、以下のコーナーに参加予定。ぜひお越しください。

- ・分野別活動紹介「教育」ラオス語絵本の展示など
- ・「エスニック屋台」カフェラオ、かぼちゃのお汁粉
- ・「識字ワークショップ」ラオス語翻訳絵本づくりに挑戦。自分の名前をラオス語で書いてみよう。

パルーンシエルターステージで留学生がラオス舞踊を披露する予定です。お楽しみに！

●OTAふれあいフェスタ

10月13日(土)・14日(日) 東京・大田区平和島一帯

水のエリア(平和島競艇場)内・交流の広場で、活動紹介とラオスの味や手工芸品の販売を行います。

問合：大田区地域振興部文化国際課03-5744-1226

●10月の運営会議

10月21日(日)13:00～ 東京事務所

10月に限り、第3日曜日に開催します。(第2日曜日がイベントに当たるため)

●その他の予定(詳しくはお問い合わせください)

10月：活動日 27日(土)

11月：運営会議 11日(日)

活動日 17日・24日(土)

12月：運営会議 9日(日)

活動日 1日・15日・22日(土)

「ラオスのこども通信」23号発行

(初旬に発送予定)

ご冥福をお祈りします

会の顧問で、教育学者であった小沢有作さんが12日未明、心筋梗塞で突然お亡くなりになりました。68歳でした。4月の正月パーティーで乾杯の音頭をいつも取ってくれる方として、ご記憶かと思います。小沢先生は、パウロ・フレイレから、識字が人間解放のためにあることを学び、在日朝鮮人、被差別部落の人びとと交わるなかで、社会的に弱い立場の人たちの識字について、発言を続けてこられました。10年ほど前スタディーツアーに参加。以来、会の活動にアドバイスをいただけてきました。感謝と共にご冥福をお祈り申し上げます。